

トランプ、プーチン、およびロシアの世界での立場

【訳者注】論者はかつて CIA の上級職員だった。その人が、このような冷静で説得力あるアメリカ批判の評論を書くのは、驚きではないだろうか？（彼は自分をロシア学者だと言っている。）こういう論文を、新聞が一度でも載せてくれるなら、我々は頭のもやもやも、感情的な腹立たしさも、一気に解消するはずなのに、新聞やテレビをいくら見ても、何がどう深刻な問題なのか、全くわからないようになっている（例えば、トランプの“ロシア疑惑”といわれるもの）。この論者は退職者とはいえ、政府の最も悪名高い部局にいたのだから、こんなことは隠すことでなく、一般常識になっているはずである。フラー氏はアメリカを憎んでこれを書いているのではない、母国の正常化を願っている愛国者だと私は思う。

Graham E. Fuller（前 CIA 職員）

Information Clearing House

トランプ大統領の、無知な田舎者のような、粗野な外交態度は、我々の注意を惹き、腹立ちを覚えさせるかもしれない。しかし彼が外遊中に引き起こした外交騒動のドラマは、アメリカ外交の根底にある、もっと深刻な問題——トランプより遥かに古い、深くネガティブな傾向性——を認識させることから、注意をそらすものだった。

トランプのごく最近の荒っぽい宣言は、こうした現行のジレンマを、すべて彼のやったことの結果と思わせるように、利用されている。要するに、もしトランプがいなかったら、アメリカは、世界に認められ尊敬される、文句のない世界の指導者として、元の快適な居場所に戻っていたかのようなのである。

悲しい事実は、我々がどんなに怒りをぶつけても、古い時代は帰ってこないことである。我々の現在の外交政策の大失敗を、一人の人間の無能力のせいにできれば、どんなに心が休まることであろう。

オバマ大統領はこの逆の問題を呈した——彼の知的で優美な、高級で物知りぶったスタイルは、我々を慰めて、この適材が担当するなら、対外政策はすべてうまくいっているのだろうと思わせた。しかし現実には、オバマのスタイルのこの安心できる調子よさもまた、多くの点で、彼が取り組まなかった、また下手な取り組みをした重要な諸問題を、隠していた。

トランプの乱暴なやり方はあまりに多くて、一つの記事で扱うことはできない。ここで私は、NATO 問題でトランプが、ヨーロッパの盟友としての信頼を崩してしまったと言われる問題についての、最近の大騒ぎについて特に焦点を当てようと思う。私はいくつかの肝要な、おそらくひねくれた、私独自の提案をしようと思う。それは、私のかつての“ソビエト学者”としての、またロシア文化やロシア問題の研究者として、見方に基づいている。

私がこれを書くのは、プーチンやロシアの、世界での地位をめぐるアメリカの前代未聞のヒステリー騒ぎ——ほかにどんな言葉があろうか——についての耐えられない憂慮のためでもある。アメリカ外交政策についてのソビエトの専門家 Georgi Arbatov の、ソ連邦崩壊に際しての言葉が、私の脳裏を離れない——「私たちはあなた方にとって、途方もないことをやろうとしています。私たちは、あなた方から、あなた方の敵を奪おうとしているのです。」実際、アメリカはそれ以来、敵が出てこないか周囲を叩き続けている。

トランプは、NATO を生かし続けるなら、EU はより大きな経費を負担すべきだと、ぶっきらぼうに言った。彼は間違っていない。実際 EU は、地球的安全保障の問題では、遥かにより大きな責任を負うべきである——しかし財政的にというよりは、自分自身の安全保障問題とはどんな感じのものか、どうやってそれを運営したらよいかを、試しに自分で決定してみることによって。

ヨーロッパの見方

今日のポスト・ソビエト世界の現実では、ほとんどのヨーロッパの政治文化が、グローバルな問題について、アメリカの見方を本能的に共有することは、もはやなくなっている。アメリカはますます、安全保障的 - 軍事的なアプローチによって、国際的危機を扱うようになってきた。アメリカの対外政策のこの軍国主義化の傾向は、特に 9・11 以来、飛躍的に大きくなっている。アメリカは“脅威の感覚”が特別鋭く、これによって、アメリカのシンクタンクや軍事産業は繁盛している。

この問題を一步先に進めよう。ワシントンの多くの甲高い声にもかかわらず、ロシアを“アメリカの安保と安泰への最大の脅威”と取ることは全くできない。止まることのないアメリカの戦争とその結果こそが、最大の脅威である。ムスリム社会の今日の過激な傾向に対する、ワシントンの軍事第一の対処法は、それを解決しないどころか、明らかに悪化させている。我々はこれまで以上に、過激化されたムスリムとの戦端を開いている。

しかし、このような多くの同時進行のアメリカの戦争は、予算に血を流させ、社会インフラの資金を食い、恐怖の文化を育て、安全保障国家の肥大化を刺激している。そして確かに、

それはトランプの下で悪化している。

その費用を見ていただきたい。アメリカは発達した世界のどんな国よりも、貧富の間の巨大な格差に苦しんでいる。この格差は経済的な困難を生み出すだけではない。それは社会的統一を腐食させ、怒りと苦しみと分断を生み出し、そもそもトランプを選んだことが間違いだったとするような、病的恐怖症を生み出す。

飽くことなく、止まることのないアメリカの戦争政策が、緩められる気配はない。その逆である。あらゆる場面で新しい危機が起こっている。世界中どこを探しても、アメリカの“重要な利益”のために“緊急のアメリカのリーダーシップ”を、必要としていない地域はほとんどない。

しかし、この西側の“重要な利益”とっているものは、もはやヨーロッパでは、広く共有されてはいない。そして軍事費を疑問とする議論が、アメリカの選挙運動中にも、また主流メディアのどこでも、皆無だったことは驚くべきことである。

また、ヨーロッパのほとんどどこでも、その安全保障と安泰にとって、ロシアが最大の脅威などにはなっていない。国を追われた巨大な群衆、移民とその結果としての国内の緊張、移民受け入れの費用、そしてムスリム過激主義——これこそ本当の脅威である。

過去数十年のムスリム世界へのアメリカの軍事介入、少なくとも 200 万のムスリムを殺したこの行為が、現在起こっている報復への深い根拠となっていると、思わない人がいるだろうか？

EU の優先問題

安全保障問題を超えて、EU はまた、その経済の中央官僚的支配を、ヨーロッパ独自の経済的・社会的諸問題へと、もっと公平に平等に、改革する緊急の必要に直面している。この点で EU は、アメリカとは反対に、自国の平穏を保持することを最大の優先課題としている。

ヨーロッパの社会的・経済的予算を飢えさせて、より大きな軍事支出を支えることは、生産的ではない。ヨーロッパはそれを知っている。グローバルな安全は、ヨーロッパ自身の経済的・社会的秩序を維持することで、よりよく保証されるのであって、アメリカの要請に応じて、何か想像上のロシアの軍事的脅威のために、大きなカネを使って軍事強化することによってではない。

ロシアの軍事的脅威とは何だろう。トップのアメリカ軍事予算だけで、次点以下の（露中を含めた）軍事予算を併せたよりも大きい。ロシアはほどほどの軍事予算をもつ貧しい国である。もちろん数値がすべてではなく、アメリカのシンクタンクは一生懸命考えて、ヨーロッパで紛争が起こった場合には、ロシアは現実にはアメリカを負かすことができるというシナリオをつくり出して、これがアメリカの軍事予算を増大させる口実になっている。

しかしロシアは何をしようとしているのか？ ヨーロッパを侵略する？ ロシアが現実には、どんな深刻な意味でも、EUの脅威となることなどないことは、ほとんどの公平に考えるヨーロッパ観察者が認めている。いったいロシアが、これまでに何度、西洋を侵略したかを見れば面白い。2世紀間に2度と言うべきか。しかし、このどちらの場合も、ロシアの国土中心へのヨーロッパの侵略に直接、応えるものだった。

最初の場合は、1800年代初期のナポレオン戦争のときだった。ナポレオンは、彼の全ヨーロッパを征服するというキャンペーンの一部として、愚かにも1812年にロシアを侵略した。フランス軍が戦略的に後退するロシア軍を、モスクワの城門まで追い詰めても、真剣に戦わせることができなかつたとき、ロシア軍は、トルストイが名付けた「冬将軍」の援助を得て、ナポレオンを中央ヨーロッパにまで追い返したのだった。

その時点で、ロシアは、ヨーロッパの反ナポレオン・ヨーロッパ連合と手を結んだ。実際、ロシアにおけるナポレオンの惨敗が、対ナポレオン・ヨーロッパ戦争のターニング・ポイントとなった。ロシア軍は、その後すぐに本国に帰った。

2度目のロシアの西洋侵略は、第2次大戦の末期であった。ここでは、よく知られるように、ヒトラーが宿命的にロシア侵略を決意し、破壊と飢餓と死を広範囲にもたらした。ソビエト連邦は、長引く戦争で、驚くべき250万というロシア人の死の犠牲を出しながら、ついにヒトラーをドイツにまで追い返した。

ナチスを敗退させる

ロシアは、他のどんな国より、ヒトラー軍を壊滅させた一番の功労者である。そして西洋の連盟国が、ヒトラーに対する「赤軍」の攻撃に最大限の援助を与えた。問題は、ドイツ軍をドイツにまで追い戻した後、ソビエト軍が本国に帰らなかったことである。スターリンが西ヨーロッパ全体（と Karelia）を占領し、40年間以上、過酷なロシア共産党とイデオロギーの支配下に置いた。

これらの出来事は、ロシアの西側侵略の2つの異常な状況を示している。これらの条件は

簡単に再現できるものではない。確かにロシアは、過去 2 世紀にわたって、果てしない、ヨーロッパ大国の影響圏を求める闘争に参加して、その周辺での数多くの軍事事変にその役割を果たした。しかし同じことは、米、英、仏、独、イタリア、スウェーデン、オーストリア、トルコなど、何年間もその周辺で戦っている、あらゆる西洋列強について当てはまる。小国にとって、どこだろうと大国の隣に住むことは、心の休まるものではない。

ヨーロッパは、場所の近さと経験によって、ロシアをよく理解している。特にドイツは、ヨーロッパにおいてロシアを説明する責任を負う第一の国である。ロシアとドイツは結局、中央と東ヨーロッパの 2 つの大国である。この場所でドイツは、ロシアをよく知り、ずっと冷静な判断をしている。

ソビエト連邦というイデオロギー帝国の崩壊以来、ドイツの世論の大半は、NATO をロシアの玄関口にまで押し上げようと企むアメリカの政策には、不快感を覚えている。そのような行動は、伝統的なロシア影響圏に、ひどく挑発的な侵入をすることだと思われている。

実際、ドイツの前の外相シュタインマイヤーは、最近、バルト諸国のロシア国境で行った、“挑発的な” NATO の軍事演習に、反対の意見をはっきり述べた。

しかしワシントンは、どこであろうと、ロシアからその影響圏を奪おうと固い決意をしているように見える。その一方で、どの国であろうが、アメリカの影響圏に挑戦しようとする者は絶対に許さない。実際、アメリカは、過去 2 世紀以上に及んで、特に宗教的、文化的、イデオロギー的レベルにおいて、ロシアに取りつかれている。(David S. Foglesong: *The American Mission and the “Evil Empire”* という深い洞察による本の、NY タイムズのレビューを参照せよ。) <https://www.nytimes.com/2017/03/13/opinion/angels-and-demons-in-the-cold-war-and-today.html>

ロシアの抑え込み

このようにワシントンは、ロシアとの間にウィン・ウィン関係はありえない、独自の戦略的見方に固執している。(トランプは関係改善に努めていると言いながら、突然、アメリカの安全保障体制の怒りを爆発させた。トランプ独特の変わったやり方は役に立っていない。)

圧倒的なアメリカの権力と、戦略的な世界への触手——ペンタゴン用語では“全方位支配” full-spectrum dominance——がアメリカの戦略的目標である。しかしそれはヨーロッパの目標でも、ヨーロッパの未来の秩序の考え方でもない。

ヨーロッパは、もっと誠実に諸外国と渡り合いたいと思っている——例えば、キューバ、イラン、パレスチナ、中国やロシアなど。そしてヨーロッパは、アメリカの援助する、中東での政権交代戦争にひどく傷ついている。ムスリム・テロや難民を見ればよい。

ヨーロッパはまた、世界的影響のバランスが、アメリカに不利に移動しつつあることに、完全に気づいている（軍事的な意味ではないが）。ヨーロッパ人は、この変化そのものを喝采するわけではないが、他の世界的強国の出現が、未来の地政学的現実を象徴するものと理解している。

だからヨーロッパが、もし今、それ自身の見方から、自分自身のロシアとの政治的、経済的、社会的関係を進めることで、自身の安全保障責任を率先的に取るならば、それは皮肉にも、遙かにより健全な立場を選ぶことになる。

ひとたび冷戦が終わったとき、NATO は本質的に、ワシントンがヨーロッパの安保政策を強力に支配するための、主たる道具になってしまった。その状況は、ヨーロッパの戦略的感覚とは、ますます合わなくなっている。

こうしてついに、トランプの粗野な言動は、新しい、当然そうなるべきだった、新しい世界的現実の下での欧露関係のあり方に、反転のはずみを与えたのである。NATO の高官たちはもちろん、絶対にそうは考えない。しかしヨーロッパの現況は、どんなアメリカの大統領によっても逆行させられる可能性はない。

そしてヨーロッパは、プーチンのヨーロッパ政策が、彼とは逆のアメリカ政策を直接反映するものと、敏感に感じ取っている。ロシアはロシアである。プーチンを排斥することによって“問題を解決する”というネオコンの妄想には、地政学的あるいは歴史的な、現実の理解が全く抜け落ちている。同じ考えによって、ヨーロッパは、アジアの中国との対決姿勢に引き込まれることはないだろう。

だからといって、何らかの合同西側軍事プレゼンスのようなものが現れて、世界のどこか違った場所に、不安定な状況をつくり出すことが、絶対にないとは言えない。しかし、もしヨーロッパが世界の別の場所で、軍事行動に参加するようなことがあれば、ヨーロッパは、自分の利益がどうなるかを自分で考えねばならない。

アメリカの頭脳はずっとソフト・パワー（軍事・経済力によらず、国際的説得力による戦略）にあったが、その方法も悲しいことに、ますます枯渇してきたようだ。